

但馬牛の雌肥育では肥育前期の飼料給与量がポイント

雌牛は去勢牛に比べて増体性が劣るため、肥育農家からは雌肥育を敬遠する声も少なくない。そこで、産肉性に大きく影響する肥育前期（10-15か月齢）の飼料給与量を1日増体量（DG）で10-12か月齢は0.3キログラム、13-15か月齢は0.6～0.7キログラムを目標に給与すると脂肪交雑、ロース芯面積及び歩留基準値が改善されることが分かった。

内容

試験には父牛が菊宮土井である10か月齢の但馬牛雌牛20頭を用いた。表1に示したように肥育前期（10-15か月齢）の1日増体量（DG）の目標値を変えて試験を開始し、16-30か月齢は通常管理として30か月齢まで肥育した。

肥育前期のDGは、10-12か月齢では設定目標どおりに増体した。しかし、13-15か月齢では1区を除き、設定目標どおりに増体しなかった（表2）。肥育中期以降のDGでは、4区が他の区に比べて少なくなった。また、飼料効率は各区に差は認められなかった。血液成分では肝機能の指標となるGOT濃

度は肥育前期から中期にかけて4区が他の区に比べて高く推移し、肥育初期からの濃厚飼料多給による肝機能低下が産肉性に悪影響を及ぼした可能性が示唆された。枝肉形質では、脂肪交雑は2区が他の区に比べて高くなる傾向を示した（表3）。ロース芯面積及び歩留基準値は2区が1区及び4区よりも優れた。

以上のことから、10-12か月齢ではDG0.3キログラム（濃厚飼料：1.5-2.0キログラム）でかなり制限し、13-15か月齢ではDG0.6～0.7キログラムを目標に飼料給与することにより、脂肪交雑、ロース芯面積及び歩留基準値が改善されると思われる。

表1 各試験区の1日増体重の目標値

区分	頭数	1日増体量(kg)	
		10-12か月齢	13-15か月齢
1	5	0.3	0.5
2	5	0.3	0.7
3	5	0.5	0.5
4	5	0.5	0.7

表2 体重、1日増体重(DG)、飼料効率及び血液中GOT濃度

項目	1区	2区	3区	4区
体重(kg)				
10か月齢	256.0	254.2	254.4	251.8
13か月齢	285.6 ab	280.8 a	304.8 b	298.2 ab
16か月齢	341.6	344.2	349.6	354.8
30か月齢	567.2	583.2	591.6	558.2
DG(kg)				
10-12か月齢 (肥育前期)	0.30 a	0.27 a	0.51 b	0.47 b
13-15か月齢	0.51 ab	0.58 b	0.41 a	0.51 ab
16-22か月齢 (肥育中期)	0.67 ab	0.66 ab	0.74 b	0.59 a
23-30か月齢 (肥育後期)	0.47 ab	0.55 b	0.49 ab	0.44 a
10-30か月齢 (全期間)	0.52 ab	0.54 ab	0.56 b	0.51 a
飼料効率 ¹	0.124	0.110	0.117	0.108
GOT濃度 ² (U/l)	81.0 a	82.8 a	82.6 a	166.6 b

^{a,b} 異符号間に有意差あり($P<0.05$). ¹ 増体量/TDN摂取量

² 14か月齢時の血液中GOT濃度

普及上の注意事項

但馬牛の雌肥育では肥育前期の飼料摂取量を制限する必要があり、そのためにはスタンションの設置による個体管理が重要である。

岩本 英治 (家畜部)

(問い合わせ先 電話：0790-47-2427)

表3 枝肉形質

項目	1区	2区	3区	4区	
枝肉重量	kg	349.0	359.2	361.0	342.7
脂肪交雑	BMS No.	4.6	6.0	5.2	5.0
肉色	BCS No.	4.2	3.8	4.0	4.0
ロース芯面積	cm ²	47.0 ab	54.8 c	51.4 bc	42.6 a
バラ厚	cm	6.9	7.2	7.2	6.7
皮下脂肪厚	cm	2.7	2.5	2.6	2.6
歩留基準値	%	73.4 ab	74.5 c	74.1 bc	72.8 a
枝肉単価	円/kg	1600 a	2245 b	1930 ab	1900 ab
枝肉価格	円/頭	559666 a	810991 b	701932 ab	653726 ab

^{a,b,c} 異符号間に有意差あり($P<0.05$).